教員紹介

作曲家の試行錯誤の痕跡を読み解く

Yuta Asai
浅井　佑太

2021年4月に着任されたばかりの
基幹研究院人文科学系の浅井佑太先生にお話を伺いました。
浅井先生は、学部では、文教育学部芸術・表現行動学科音楽表現コース、
大学院では比較社会文化学専攻音楽表現学コースのご所属です。

Q1 ご経歴について教えてください。

生まれも育ちも大阪です。京都大学で学部は経済学を、修士では美学美術史学を修めました。その後、ドイツのケルン大学で音楽学を学び、博士号を取得しました。東京に来たのはほとんど初めてに近いです。

Q2 先生のご専門の研究領域のお話を聞かせてください。

直近ではアントン・ウェーベルンというオーストリアの作曲家の資料・草稿研究をしていました。出版されている楽譜ではなく、スケッチや未完成作品を研究の対象にして、彼の創作語法がどのように発展していったのかを考察します。作曲家の試行錯誤の痕跡を解読したり、作曲プロセスを再構成したりする――と言ったら多少は分かってもらえるでしょうか？ちなみに、こうした一次資料の大半はコピーが禁止されているため、現地に赴いて、すべて手作業で書き写す必要があります。これは結構ハードな作業で、累計六ヶ月ほどスイスのアーカイブに籠もりきりの隠遁生活を送っていました。正直に言うと、もうあまりやりたくはありません…。手と目と神経を酷使するし、ぎっくり腰にもなりました。「音楽学とは気合と根性の学問だと思い直しました」と当時、恩師にメールで書いたことを覚えています。

現在はかつての研究成果をまとめているところですが、少しずつ新しいことにも挑戦したいと考えています。具体的には、音楽とテクノロジーの関係、電子音楽やVR・AR、AIといったものに興味があります。それとも関係しますが、高校生のころに挫折したプログラミングももう一度学びなおしている最中です。どれも開店休業状態ですが、何かしら形にできるように、まずは色んな仕事をなんとか早く終わらせようと奮闘している日々です。

Q3 ドイツに留学されていたとのことですが、ドイツでの生活はいかがでしたか。

大変の一言です。食事は最後まで合いませんでした。「自炊すればよいのでは？」と思うかもしれませんが、自分で作った食事はもっと美味しくありません。体重は50kgを切ることが多かったです。とはいえ、やはり語学面が最も苦労しました。喋れないときには喋れないなりの、ある程度流暢に喋れるようになった後でも喋れるなりの違う苦しみがあります。特に最初の1年は、自分の思うことを上手く伝えられないもどかしさとの戦いです。ゼミの教室のドアを開けるのが怖くなって、本気で家に引き返したくなったことも何度かあります。あとは自分の精神状態やモチベーションをコントロールすることの難しさ。自分の研究が通用するのかと自問する日々。金銭面・就職に関する不安。母語で喋る相手がいないと、こうしたことで病みやすくなります。留学生活は自分の大きな財産ですが、「充実した五年間だった」と安易に総括したくはありません。色んな失敗もしたし、不義理なことも沢山しました。

月並な感想ではありますが、それでもやって行けたのは、周りの人々に恵まれたからの一言につきます。数少ない理解者の友人、調査先で出会った研究者の方々、何より指導教員のChristoph von Blumröder氏には感謝の言葉しかないです。振り返って思えば、失敗する機会／許される機会を多く得ることができたのが一番の財産です。自分でやってみて失敗して学ぶこと以上の経験はありません。そして、そうした経験を得ることは、歳を重ねるごとに難しくなります。自分に関して言えば、良くも悪くも、学生のときのように大胆な失敗ができないポジションを得てしまいました。それでも細かい失敗は毎日のようにし続けていますが…。

Q4 お茶大生にどのような印象を持たれましたか。

お茶大生は皆、素直で真面目だ――と聞いていましたが、案外そうでもないことが分かってきました。実際にはひとりひとり考えていることも関心も違うし、よい意味でクセの強そうな学生にも何人か会いました。一見おとなしそうに見えても、頭の中でははっきりとした自己主張を持っている、そういった印象が素直なところでしょうか。授業が始まって二週間ほどですが、ステレオタイプの「優等生」はまだ見ていません。それはよいことだとも思っています。

Q5 学生のみなさんへのメッセージをお願いします。

授業を受けたり課題をこなしたりすることだけが勉強だとは考えてほしくはないです。課外の時間において、自分で問題を設定し主体的に行う物事の方が本来はずっと大事なはずです。もちろん、悩んだり困ったりしたときには、できる限りのサポートはします。ただし、実際に努力するのも、最後に判断／決断するのも自分自身であるということは忘れないでください。結局のところ、自分の正しさや実力を証明できるのは自分だけでしかないのです。

文責：基幹研究院人文科学系教授
小松祐子